2019年5月25

老子会会報

老子会　主催
第017号

老子会のモットー

「老子の道の精神を生かし、自分を変え、世界を変え、未来を変え、世界平和を構築し、人類の幸福を推進していく」ことをモットーとする。

第61回老子会から

老子道徳経　第75章

原文

民之飢、以其上食税之多、是以飢。民之難治、以其上之有爲、是以難治。民之輕死、以其求生之厚、是以輕死。夫唯無以生爲者、是賢於貴生。

書き下ろし文

民の飢(う)うるは、その上(かみ)の税を食(は)むことの多きを以(も)って、ここを以って飢う。民の治め難きは、その上の為すこと有るを以って、ここを以って治め難し。民の死を軽んずるは、その生を求むることの厚きを以って、ここを以って死を軽んず。それ唯(た)だ生を以って為すこと無き者は、これ生を貴ぶより賢(まさ)る。

現代語訳

民衆が飢えに苦しむのは、お上が税を取り立て過ぎるからで、それゆえに飢えるのだ。民衆が逆らいがちになるのは、お上があれこれと余計な事をするからで、それゆえに逆らうのだ。民衆が命を軽んじるのは、人々が自分の命に執着するからで、それゆえに命を軽んじる様になるのだ。そもそも人生についてあれこれ考えずにありのままに生きる者こそ、無駄に知恵を働かせて人生を尊ぶ者より勝っている。

解釈

「お上が自分の命を重んじるあまりに、民衆は自分の命を軽んじるようになる」となり、一見意味が通じるように見えて第十三章にあるような「我が身を重んじるような人物にこそ天下を任せられる」という従来の老子の主張にはそぐわないように思える

また最後の句も少々唐突な印象を受けておさまりも悪い。むしろここは本来の字句どおりに読み、前半2句と後半2句を分けて解釈した方が良いであろう。

という事で前半2句は無為の政治を勧める句として解釈し、後半2句は「人生についてあれこれ考えすぎず、ありのままを受け入れて無為自然に生きよ」という無為の生き方を勧める句とした解釈した次第である。

第６１回老子会から

解釈

人々が飢えるのは、王が重く税金をとるからだよ。だから、彼らは飢え苦しむんだ。人々が治まらないのは、王が生活に干渉するからだよ。だから、治めにくいんだ。

人々が自分の生命を軽く捨てるのは、王が「生」を追求し過ぎてるからだよ。だから、人々は自分の生命を軽く扱うんだ。

生きる事に執着しないヒトこそが、生命を大切にする方法を知るんだね。つまり、今回、この章で…、生への執着は逆効果だよ、と老子は教えてくれたもの。

民の飢（う）うるは、其の上（かみ）の税を食（は）むことの多きを以て、是を以て飢う。

民の治まらざるは、其のそのうえの為す有るを以て、是を以て治まらず。

民の死を軽んずるは、其の上の生を求むることの厚きを以て、是を以て死を軽んず。

それ唯だ生を以て為すこと無き者は、是れ生を貴（たっと）ぶに賢（まさ）れり。

人民が飢えに苦しむことになるのは、お上（かみ）が税を沢山取りすぎるからであって、それゆえに飢えるものだ。

人民が治めにくくなるのは、お上があれこれ干渉するからであって、それゆえに治めにくいのだ。

人民が死ぬことを何とも思わなくなって無茶をするのは、お上が生を求めることに熱心すぎるからであって、それゆえ死ぬことを何とも思わないのだ。

そもそも生きていることを特に気にかけたりしない者こそ、生を貴ぶ者よりもまさっている。

人民が飢えるのは、その上に立つ者が税を多く取り立てるからである。そういうわけで飢える。

人民が治まらないのは、その上に立つ者が余計な政策を行なうからである。そういうわけで治まらない。

人民が死を軽んじるのは、その上に立つ者が自分が生きることばかりを追求するからである。そういうわけで死を軽んじる。

いったい、生きることにとらわれない者こそ、生きることを重視する者よりも優れている。

「為す有るを以て」は煩雑な政策をとる政治のこと。

「生を求むることの厚き」は為政者が自分の生き方ばかりを大事にし、人民に過酷な負担を課すことなどをいう。

「生を以て為すこと無き者」はよい生活を追求することなどをしない者のこと。

「生を貴ぶ」は生を重視すること。

「賢」はまさる、「すぐれる」の意味。

ここでは、為政者を戒めて無為の政治をすすめている。

為政者が私欲にまかせていろいろなことをやりすぎると、その被害を受けるのは人民である。税金の取り立てがきびしいと、民衆は飢えて悪事を働くことになる。細かい法律でしばりあげられると、民衆は悪知恵をはたらかせて法網をすりぬける。

上に立つ者は、自分の生存への執着をすてて、無欲無心になることが大事である。

人民が貧困な生活を余儀なくされるのは、統治者が税金を余分に取りすぎるからである。それによって飢えることになってしまうのである。 又、人民をうまく治められないのはあれこれと規則が多かったり、余計なことをしているからなのである。 これが治世がうまくいかない理由なのである。

人民が命を軽んじてしまうのは統治者が自らの保身ばかりに目がくらんでいるからなのである。

生きることのみに汲々としている人より、生に対して淡々としている人の方がまさるのである。

この章には「貪損（どんそん）」というタイトルが付けられることがある。つまり権力者に対し「貪欲をいましめる」ということでもあり、謙虚さをも求めている。

この章では、権力を持った者が心がけなければならない大切なこととして「無私」であるということを説いている。

老子道徳経　第７６章

原文

人之生也柔弱、其死也堅強。萬物草木之生也柔脆、其死也枯槁。故堅強者死之徒、柔弱者生之徒。是以兵強則不勝、木強則折。強大處下、柔弱處上。

書き下ろし文

人の生まるるや柔弱、その死するや堅強なり。万物草木の生まるるや柔脆(じゅうぜい)、その死するや枯槁(ここう)なり。故に堅強なる者は死の徒(と)にして、柔弱なる者は生の徒なり。ここを以(も)って兵強ければ則(すなわ)ち勝たず、木強ければ則ち折る。強大なるは下(しも)に処(お)り、柔弱なるは上(かみ)に処る。

現代語訳

人の体は生まれてくるとき弱々しく柔らかいが、死ぬと固く強(こわ)ばってしまう。草木やその他の生命も生まれてくるときは柔らかで脆くみえるが、死ぬと固く干(ひ)からびてぼろぼろになってしまう。つまり固く強ばっている方が死に近く、柔らかく弱々しい方が生に近いのだ。だから軍隊がいくら強くとも力攻めでは勝てないし、樹木に柔軟性がなければ簡単に折れてしまう。このように強く大きなものこそ下にあり、弱く柔らかいものこそが上にあるのだ。

解釈

生命のあり方として、固く強くあるよりも柔らかく弱くあることの方が生に近いと説いておられるである。自然界は強ければそれで生き残れるという単純なものではなく、たとえ弱くとも環境に順応する能力の高いものの方が生き残る適者生存の世界でござるな。

そして人の生き方も自らの力に頼って強さを誇るのではなく、弱々しく謙って柔軟に生きよとおっしゃっているのだと思う次第。

第四十二章で「強梁なる者はその死を得ず。吾れ将に以って教えの父と為さんとす。」とおっしゃっているように、柔弱であることは老子の教えの根本の一つであるる。

人の生まれたときは柔らかでグニャグニャしているが、死んだときには堅くてこわばっている。

草や木やその他一切のものは、生きているときはみな柔らかくてふっくらしているのだ、死んだときには枯れてカサカサになっている。

だから堅くてこわばっているものは死者の仲間、柔らかくてしなやかなのは生者の仲間。

それ故に武器も剛（かた）すぎると相手に勝てず、木も堅すぎるとぽっきり折れてしまう。すべて強大なものは敗れて下位に立ち、柔弱なものが結局は優位に立つのだ。

［諸橋轍次］

エネルギーが高く生きているものは柔らかくてみずみじしい。エネルギーが低くなるときが死ぬとき、干からびて固くなる。しなやかなものこそ強大堅固なものをコントロールできる。

柳に風のごとく長期的にみれば柔軟なものが真の生命力を発揮する。

堅くて硬直したものはかえってもろく折れやすい。ものごとはすべて堅固で大きなものが低い下位にあり、柔らかで弱弱しいものが高い上位にあるものだ。

人間って、ヤヤコ（赤ちゃん）はヤワヤワのプニプニで、泣いたり笑ったり感情を素直に表現出来る年となり、死ぬ時になってみたら、色んなシガラミとか自分の築いてきたモンでガチガチのコチコチや草や木かで同じである。

生まれて間なしの時は柔らかいけど、死ぬときは枯れて固くなってしまう。そやから、ガチガチのコチコチは「死」のシンボルで、ヤワヤワのプニプニは「生」のシンボルやねん。

強大な力て「強いんや。絶対正義やねん」で、いらん争いが起こったりするしわざわざ関係ない争いに首突っ込んだりして、でも、いつかシンドなって自分の首しめてしまうよ。

そんな強さなんかでは絶対勝たれへんよ。ガチガチの強いモンは風が吹いたらポキッと折れてしまうんやで。ヤワヤワのプニプニが、最強の武器と防具やよ。

老子会の『人』高木　好秋さん

高木好秋さんは大阪府柏原出身。

学生時代はサッカー部に所属、高校の先輩には杉本高文（明石家さんま）さんや、城島茂（TOKIO）さんがいらっしゃいます。

そのころから旅行が趣味で、読書愛好家のトラベラーでした。

社会人になってからは、貿易会社の社長の紹介で、中国（江蘇省蘇州）出身の奥様と結婚。お仕事の関係でも中国へ年に２～3回足を運ばれています。

幼くして父を亡くし、母子家庭で育った高木さんですが、「母が他界してからは天涯孤独だった。」と仰います。そんな中、奥様との縁に恵まれ、１人から４人家族となりました。習慣の違いに驚くこともありますが、今では家族の幸せを満喫していらっしゃいます。

お仕事は中国からの「人材派遣」。大手から中小企業まで幅広く優秀な人材のアレンジをされています。言葉の問題で苦労することも度々ですが、マッチングした企業の方から「感謝の言葉」をもらった時が、何より嬉しいとおっしゃいます。今は、介護関係と惣菜関係の業界で人材が不足しているので、これからも役立つ人材を紹介できるよう頑張りたい、とのことです。関係者の方は、一度お話を伺ってみては如何でしょうか。

「ピンチはチャンス」が座右の銘で、どんなことにもポジティブに挑戦する高木さん、「中国語は苦手ですが、夫婦げんかも中国語でしたい。」と、楽しい夢をふくらませています。

（余保充徳）

＜老子会の皆さんへ＞

大手、中小関係なく「人材確保」に困っておられます。人材でお困りの方がいらっしゃれば、是非お役に立ちたく思います。これからもお世話になりますが、よろしくお願いいたします。

（高木好秋）

事務局からの「第６２回老子会」のご報告

老子会の皆様には、いつもご協力を頂きありがとうございます。４月は大阪ガーデンパレスで行いました。２６名が参加し真剣な中にも笑いがあり、胡先生のユーモア溢れる講義に聞き入っていました。交流会は同ホテルのレストランで親睦を深め合いました。今月からは２章ペースで学習を進めていきます。７月までに全８１章を修了する予定です。現在の老子会は「一般社団法人」の設立に向けて準備を進めています。皆様には８月の総会でご案内申し上げます。季節の変わり目、くれぐれもご自愛ください。

石井　政　事務局長

【今後の日程】

６月２９日（土）１５時　大阪中央公会堂　　老子会　学習会
７月２７日（土）１５時　甲南大学　633教室　老子会　学習会
※両月とも、終了後「虎の穴」にて懇親会を予定しています。（3500円）
８月３１日（土）１７時　道頓堀ホテル　　老子会総会

老　子　会

〒658-8502
神戸市東灘区岡本8-9-1
甲南大学　国際言語文化センター　胡金定研究室

電話: 078(435)2353
携帯番号:090-9169-2820(事務局長)
FAX: 078(435)2545
E-mail　kokintei@konan-u.ac.jp